

## 愛川町立中津小学校

研究テーマ：どの子ども安心して、居心地のいい学ぶのが楽しい学校

### 1 実践の目的

本校には、児童の約4人に1人が外国にルーツをもち、日本語指導を必要としている児童は60人以上いる。特別支援学級在籍児童も増加の傾向があり、その中でも外国にルーツをもつ児童は多く在籍している。通級指導教室もあり、通室希望で待機している児童も数名いる。

全国学力・学習状況調査の平均では全国・県に比べて低く、例年、町全体の平均よりも低い傾向にある。今年度の学力調査の結果にも、国語、算数ともに基礎的な学力の底上げが必要であり、後半の文章問題などになるにつれて、無解答率が高くなる児童が多いことが特徴として挙げられる。また、メディアを利用する時間が、全国平均を上回っている児童が多いことも課題として捉えている。

このように、本校は外国にルーツのある児童をはじめ、多様な背景をもち、様々な支援を必要とする児童が多い。課題は多いが、この多様化する現状を受け入れて柔軟に対応する文化が既にあることは、インクルーシブな学校づくりを考える上で強みになると考えられる。

そして、この課題を改善し、強みを生かすためのテーマを全教職員で協議の上、「どの子ども楽しく学び、安心して過ごせる居心地のいい学校」と設定した。



### 2 実践の内容

#### (1) 校内研究について【概要】

この校内研究の根底にあるのは、神奈川県が掲げるインクルーシブ教育の理念、すなわち「すべての子どもが同じ場で共に学び、共に育つことを通じて、共生社会を実現する」という目標である。研究を推進するにあたり、講師から示された「児童は今学校や教員のやり方の何に困らされているか」という視点は、教職員全体に強い衝撃を与え、意識を転換させる核となった。当初の「児童側からの困り感」という捉えから、この新たな視点へと切り替えることが提起された。これにより、児童へのかかわり方を見直し、変えていくことが研究の中核であると確認された。

そこで、「居心地がいい」と「学ぶのが楽しい」の両輪にせまるため、研究教科を体育科に絞って進めることになった。「どの子ども」という点を重視し、児童にかかわる教職員皆で意見を出し合えるよう、通常の学級、特別支援学級、日本語指導教室、級外、保健室の教員の全てが各グループに所属した。また、Y-Pを用いた学級風土チェックを定期的に行い、特に自己肯定感が低い児童を中心にアセスメントを行った。

#### 2学年の実践

2年生では、自分たちでアスレチックを作る活動を行った。授業は複数の教員で行った。場を考える時に難易度も2パターン

用意するなど、どの子もチャレンジしたくなる工夫を取り入れた。



### 【研究協議の充実】

授業公開後の研究協議では、付箋紙を用いたグループ協議の形式を取り入れている。授業を参観しての様々な気づきを授業者の考える協議の柱に沿って話し合い、成果と課題を共有する中で、授業の改善点を模索している。グループ協議後は各グループに1名が残り、他のメンバーは他のグループに移動し、残ったメンバーと互いの学びを交換している。今年度は学年グループでの研究・協議が活発になったので、系統的に内容を考えたり、体育の学びを他教科に活用するアイデアを考えたりする機会が増え、研究の深まりを感じている。

### (2) 外部講師の研修について

インクルーシブな学校を目指す校内研究の中で、昨年度から体育科に教科を絞り、教職員で学びを深めてきた。課題の解決に向けて愛川町の児童の実態に精通したSC2名を招き、研修会を実施した。体育科における、児童の苦手意識が何に起因し、どのような手立てが有効なのかを、感覚でなく科学的根拠をもって理解できるようになるために、4回の研修の場を設けた。

研修の中では運動を苦手とする児童への理解をより深めるため、言語や視覚情報のみで指示を出した場合、どれだけ正確にイメージできるか演習を通して体験したり、実際のケース(こんな指示をしたが、子どもが困ってしまった等)をグループで出し合い、演習での学びを生かして支援の方法を

考えたりした。

## 3 実践の成果と課題

### (1) 成果

「学ぶことが楽しい」という主題への接近  
児童一人一人が主体的に考え、子どもたち同士で学びを進める場面を工夫することで、「学ぶことが楽しい」という研究主題に迫ることができた。児童の感想からは、自己肯定感が高まったと感じられる声が多く寄せられていた。

### (2) 課題

#### 外国につながる児童の言語面での課題

合言葉を使った協働学習により、外国につながる児童が伝えたいことを見つけ、意欲を高めることができた一方で、実際に話したり書いたりして伝える場面では、得意な言語で自由に話すことができた方が生き生きと活動できるという姿も見られた。

## 4 今後の展開

### (1) 今後の研究の方向性

- 個人の振り返り(これまで何をしてきたか、これから何をしていきたいか)を次年度に生かすことが大事である。
- 手立てを尽くしても取りこぼしてしまう児童は必ずいる→取りこぼしてしまった児童を意識して今後の取り組みに生かす。
- 新しく赴任した先生にどう引き継ぐか。学年団で研究してきたこと等を記録し伝承していく。
- 縦(学年)の関係と横(教科横断)の関係を意識する。

### (2) 残された課題

多様化の最先端にある本校だからこそできる「特色ある取組」を、児童の願いを主体として開発していきたい。